

二人ぼっちの誕生日

wancorohiro

赤い毛皮に、真っ赤な眼。逆立ったたてがみが夜風にゆらゆらと揺れていた。

月明かりにきらきらと、それはまるで炎のよう。

真っ赤な獣は静かに街を見下ろしていた。小さく、ぽつぽつと光る街の明かり。その下では手をつないだ家族が笑顔で歩いているのが見えた。

ふうとついた息は白く、もう随分と寒い。それでも獣はただ街を見下ろしていた。

獣の名前をインディといった。

ぬれた鼻をひくひくとさせ、インディは大きな木の根元で小鳥の声に耳を傾けていた。

もう秋の終わりというのに陽光はずいぶん温かく、冬支度をしなくてはならなかったが、インディは気持ち良い温もりにつられて、うつらうつらと今にも居眠りをしてしまいそうだった。

森の奥で暮らすようになって、インディはようやく静かに生活出来るようになっていた。木の実やまきだってまだまだ多くいるのだけれど、こう気持ちのいい陽気と、小鳥の声を聞いていると、やはりのんびりとしてしまう。

——ここまでは、人間はやってこれないから怖い思いをしなくてすむ。

ずっと前に、人間に出会ったとき、インディはひどい目にあった。子どもはインディの顔を見て泣き叫び、大人は鉄砲を持って、インディを追い回した。

怪物、というらしい。インディは自分の大きな手を見てため息をついた。傍らにリスがちょこちょこ通り過ぎる。つぶらな瞳が可愛らしい。あんな生き物だったら追いかけて回されなくてすんだのだろうか。

悲しくなりそうな胸をどんと叩いて、インディは木を見上げた。暖かな陽光が差し込み、きらきらと輝く。悲しくて、冷たくなる心がほんの少し温もる。

小鳥が小首を傾げて、インディを見つめる。リスも木の上からインディを伺う。

「——そんな顔しないでよ。ボクは大丈夫だよ」

インディがそういうと、小鳥もリスも分かったのかわからないのか、小鳥はそっぽを向いて飛び去り、リスは別の木へ飛び移った。

そうしてようやくインディは立ち上がり、地面に手をついて軽く伸びをしてから、木の実集めをするためにまた森の中を歩き始めた。

魔法使いのおばあさんにもらった特別丈夫な白の袋をひきずりながら、インディは落ちている木の実を拾ってはその袋に入れていく。大きなその袋の半分くらいまで木の実が集まり、そろそろ帰ろうかとインディが道を引き返し始めたとき、ふと木陰に白い足があるのが目に映った。

細い、人の足。足の裏は黒く汚れていて、小枝ですったのかとところどころ白い足に赤い痕が残っていた。

「——人だ……人間だ……」

インディが恐る恐る木をのけて、覗き込んでみると、そこには少女が横たわっていた。

気を失っているのか、眠っているのか、息はしているが、目は開かない。

——人間は怖いけど、でも放ってはおけないよね。

インディは自分に言い聞かせて、その痩せっぽっちの少女を抱いて、家路を急いだ。白い袋には木の実が半分。その子と袋、同じくらいの重さだな、とインディは思った。

綺麗なシーツに取り替えて、さっそく少女をベッドに寝かせてインディは小首を傾げた。

こんな森の深くまでどうやってやって来たのだろう。大人だってやってこれないというのに。人肌に温めたお湯でぬらしたタオルで、汚れた足を拭う。裸足で歩いてきたから怪我をしているかと思ったけれど、拭ってみるとひどい傷はなく、インディはほっと胸を撫で下ろした。

だけどもますますインディはわからなくなった。どうしてたった一人で裸足でこんなところまで来たのだろう。街ではお母さんが心配しているだろうに。

インディは椅子に座って、眠る少女の顔を眺めながら、顔をしかめた。

考えても何も分からないインディは、何か自分に出来ることはないだろうか、と考え始めた。

ぐう、と音が鳴った。自分のお腹が鳴ったのかと思いお腹を押さえると、またぐう、と音がなり、音の先を見てみると、少女が眉をしかめて寝返りをうった。

「——ああ、お腹が空いてるんだ」

インディはこくりと一人頷いて、それから思いついたように手をぽんと叩いて、ぱあ、と笑みを浮かべた。

「そうだ、ごはんを作ってあげよう」

インディは自慢のキッチンへ向かい、魔法使いのおばあさんからもらった鍋を用意し、色々な食材を並べて料理を始めた。

——おばあさん仕込みの元気の出る料理なら、きっとすぐに元気になるはず。インディはそう思って、てきぱきと料理を作りだした。

作り始めたシチューはやがていい匂いになって、部屋を包み込んだ。

ぐう、とまたお腹の鳴る音が静かに響き、ベッドで眠っていた少女の眉がぴくりと動く。少女が目をはちりと開けて、すんすん、と鼻を鳴らして辺りに漂う良い匂いに気付いた。

むくりと、静かに起き上がり、少女は匂いを嗅ぎながら、ぽつりと呟くように言った。

「すごく、いい匂い……」

奥のキッチンでは少女が目覚めているとは気付きもしないインディが、出来上がったシチューを小さな木皿に盛っているところだった。

「へへ、出来た出来た。これを食べたらきっと元気になるぞ」

インディの大きな口がきゅっと上がって笑みを浮かべる。赤の瞳の裏には元気になった少女の姿が映っていた。

——これを少女の眠るベッドの横へ置いておこう。姿を見せるときっと泣いてしまうから、起こさないようにそっとそっと。

インディは一人こくこくと頷きながら、シチューをお盆に載せて、キッチンを出ていこうとした。

「——あのう、誰かいませんか？」

突然、声をかけられてインディは思わず体をびくつかせ、せっかくのシチューを取り落としてしまいそうになった。

わたわた、と何とかシチューをこぼさず、ほうっと息をついて、インディは少女に向かって答えました。

「——こ、ここにいるよ！ 今シチューを作ったところだからちょっと待ってて」

——どうしよう。顔を見られたら泣かれてしまうし。

インディは一人焦りながら、辺りを見回し、キッチンに置かれた白い手拭いを口元に巻いて、少女の前へ出た。

インディの姿を見ても、少女は悲鳴ひとつ上げずにぼんやりとインディの方を見つめ、小首を傾げていた。

インディ自身も、何の反応も示さない少女に驚いていた。いつもだったら、インディを怪物と呼んで泣きながら逃げ出すというのに、少女は眉ひとつ動かさない。

とりあえず、シチューをベッド脇のテーブルに並べると、その拍子にようやく少女は口を開いた。

「あのう、ここはどこですか？」

インディの方に少女が僅かに顔を向けると、長い黒髪がぱさりと肩に掛かった。

訊ねられたインディは、恐る恐る少女に向かって答えた。

「——ボクの家だよ。君は森で倒れていたんだよ」

「お母さんを知りませんか？ 途中まで一緒にいたと思うんだけど……」

少女は親指をぎゅっと握りこんで、弱々しく言った。語尾は濁って、唇を軽く噛んで口を閉ざした。

おばあさん以外にこんなに多く話したことのないインディはこんな表情をする少女に、どうしていいかわからずに、とりあえず謝ってから答えた。

「ご、ごめん、ボクは知らないよ」

少女はがっかりしたように俯く。困ってしまったインディは慌ててシチューの皿を少し前へ出して、少女を元気付けようと声をかけた。

「——おなかすいたでしょ？ よかったら食べてよ」

インディに言われて少女はスンスンと鼻を動かし、香りをかいでから、うん、と小さく頷いたが、スプーンに手をつけずに、また黙って俯いてしまった。

——こんなとき、どうすればいいんだろう。人と接することがまるでないインディはますます困ってしまう。ただ沈黙してしまうのはきっとまずいだろうと思い、インディはとにかく思いつく言葉を並べるように口を開いた。

「ぼ、ボクはインディっていうんだ。——君は？」

思わず出たのは自分の名前だった。そして気付けば少女に名前を尋ねていた。

「——アルマ、わたし、アルマっていうの」

アルマ、と名乗る少女はちらりともインディの方を見ずに、答えた。

そのアルマの仕草に、インディの胸がずきりと痛んだ。決してこちらに目を合わせない少女に、インディはだんだんと悲しい気持ちでいっぱいになっていった。

しょんぼりと、インディの尻尾が自然と下がっていた。視線を下げると、目に映るのは少女とは違って丸太のように太いふともも。切っても切っても鋭く伸びる爪。

この子もきっと、本当はボクとは話したくなんてないんだろうな、とインディは思った。怪物なんかと話したくはないんだ、とそう思った。

そのとき、アルマは、あっ、と声をあげてインディの方へ向きかえって言った。

「ごめんなさい、インディ。助けてくれたのにまだお礼も言ってなくて……」

そういうアルマに、インディは思わずきょとん、としてしまった。

「助けてくれてありがとうね、インディ」

にっこりと、アルマは笑みを浮かべて言った。

「——君は……」

インディは恐る恐る訊ねた。訊ねてはいけないと思いつつ、答えを期待してはいけないと思いつつ、インディは訊ねた。

「君は……ボクが怖くないの？」

ごくりと、インディは喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

インディの緊張とはまるで正反対の様子で、アルマは首を傾げて聞き返した。

「インディは怖い人だったの？ わたし、ほとんど目が見えないから……インディってどんな姿をしているの？」

そう言いながら、アルマはぼんやりとインディの方へ視線を流した。焦点の合わない目は、インディの肩辺りを眺めていて、よく見るとその目が何も捉えていないことに気付く。

インディは改めて自分の体を眺め、口を開いた。

「ボクは……全身が赤い毛皮で……目と耳が二つ、鼻と口がひとつで、それで……」

それで、とインディは躊躇いながら続けた。

「みんなはボクを怪物だって……」

——そう言って、みんなボクから逃げていく。みんなボクに石を投げる、鉄砲を向ける。

そう言ってボクを苛めるんだ。

悲しい記憶が甦って、インディは思わず泣きそうになるのを堪えた。肩を震わせているインディにアルマはやはり虚空を見つめて言った。

「怪物？ 怪物ってなあに？」

不思議そうに、インディを眺めるアルマに、インディは震える声を抑えられずに、ゆっくりと答えた。

「わからないけど……怖いみたい」

ふうん、とアルマは首を傾げて、視線を下に投げて、考えるようなそぶりで顎に人差し指を当てて、それからにっこりと笑ってインディに言った。

「でもインディの声は優しいよ？ それに……料理も上手みたいだし」

また鼻をスンスンと鳴らして、アルマは屈託ない笑みをインディに向けた。

ずっと遠くに見ていた、子どもの笑顔がそこにあった。インディはそれだけで思わず身を震わせていた。心臓が、どくどくと胸を熱くさせる。

「それとも、私を太らせて食べちゃうのかな？」

そう言って、アルマはくすくすと笑う。インディは薄っすらと瞳を濡らした涙を拭いて、明るい声でアルマに言った。

「違うよ。そんなことしないよ」

うん、とアルマは頷き、優しい笑みを向ける。インディは笑みを隠すように唇を噛んで、嬉しくってしょうがない気持ちを抑えた。たったこれだけのことで大喜びしてしまうのが恥ずか

しかつたからだ。

「分かつてるよ。食べちゃうつもりだったらわたしが起きるまえに食べちゃうでしょ？」

アルマがそう言ったとき、アルマのお腹がぐう、と鳴った。

「あ、シチュー食べなよ。食べられないならボクが食べさせてあげるから」

インディがそういうと、アルマは少し照れた様子で頭を掻いて、それからありがとう、と言ってこくりと頷いた。

軽いアルマの重みを肩に感じる。一步、一步、歩く度にアルマの細く白い手が、インディの肩をぎゅっと掴む。

目を細めて、アルマがしんと静まる森に耳を傾けていた。さわさわ、と鳴る葉音がインディの耳にも届いてくる。目の見えないアルマだから、大切に感じようとする音。アルマの心地良さそうな笑みを見ながら、インディもそっと微笑む。

——誰かがそばにいるのって、何だか気持ち良いや。

木の実を拾いながら、ふとインディは思った。ずっと、一人でいることに慣れすぎていて、こんな風に誰かをおぶさって森を歩くななんて考えたこともなかった。

いろんな、毎日のことが、楽しく思えるようになっていた。

いろんな、今までのことが、寂しかったんだと気付くようになった。

背中で、アルマが微笑む。それだけで、インディの胸は温かくて優しい気持ちに満たされていくようだった。

だから、時々、夜になると眠りながら泣くアルマを見ると胸が痛んだ。どうしてかはわからない、ずきんとくる胸の痛み。

泣かないで、と優しく頭を撫でた。そうすることしかインディには出来なかった。

そうやってアルマに触れているとほんの少しだけ痛みは和らいで、インディはアルマが泣くたびにそうやって頭を撫でた。

「ねえ、インディ？」

「うん？」

インディの方に顔を向けて、不意にアルマが訊ねた。インディはかがんで、足元に落ちているきのこを拾いながら、アルマに振り返る。視線は合わないけれど、インディはアルマを見つめて首を傾げた。

「インディっていつもは何をしているの？」

「何って……散歩かな？」

よく、木の上から、町を見ていた。

インディも、森に住む魔法使いのおばあさんもずっと一人で暮らしていたから、インディは家族というものを知らない。インディは父親の顔も知らないし、母親はインディがまだ小さな頃に、おばあちゃんにインディを預けて遠くへ行ってしまった。

家族というものを知らないインディは、いつも遠くから町を見下ろして道を行く親子の姿を眺めていた。

楽しそうに笑う男の子、優しそうな両親。そんな姿を目に焼き付けて、帰る途中、大きな木の枝に手を繋いで、見たこともない父親の姿を思い浮かべたりしていた。

「私はね……ずっと家にいたんだ」

アルマは目を瞑って言った。外で遊ぶのは危ないから、と母に止められて、いつも家でただぼんやりと外から入ってくる音に耳を傾けていた。

はしゃぐ子どもの笑い声、街道を走る馬のいななき。時々、自分の顔を触りながら、手探りで笑い顔を作ってみたこともあった。上手に笑えているかもわからないアルマは、しゅんと一人、唇を噛んだ。

「友達なんて一人もいなくてね。いつも一人で退屈で……でもお母さんが初めて森に連れて行ってくれたんだ。手を繋いでね」

にっこりと、アルマは笑みを浮かべて言う。それほど嬉しい出来事だったんだな、とインディもつられて微笑む。

「せっかくのお出かけだったのに、はぐれちゃうなんて、わたしってぐずよね」

可愛らしかった笑みが、ほんの少し崩れて、泣き笑いになっていた。瞳がほのかに潤んできていた。

「だ、大丈夫だよ。きっとすぐにお母さんが迎えに来てくれるよ」

そう言ってインディはゆさゆさと身体を大きく動かして、背中のアルマを大袈裟に揺すった。アルマは細い手でしっかりとインディに抱きついて笑った。

「やだ、インディやめてよお」

涙が飛んで、またアルマは笑顔に戻り、インディはほっとしながら、しばらくそうやって森を歩いた。

インディとアルマはしばらく話をしながら森を歩いていた。

お互いのことを確認しあうように、町であったこと、森であったこと、それも楽しいと思ったこと、幸せだと思ったことを話した。

それは、互いの心を分け合っているように見えた。。互いの心を温めあうような、流した涙を舐めあうような、そんな姿に見えた。

「——あ、何か落ちてる」

ふと、インディが道端に落ちている人形に気がついた。インディはアルマを落とさないように気をつけながら身をかがめて、足元の人形を拾い上げた。

「なあに？」

ちりん、と鈴の音が鳴った。その音で人形の足首に鈴がついてあることに気付く。

「女の子のお人形みたい」

そう言いながら、インディはアルマの手元に人形を持っていきそっと触らせた。

アルマは急に手に触れた人形に少し驚き、びっくりと手を引き、それから恐る恐るくたびれた人形の頭にそっと触れた。毛糸の髪の毛を優しい手つきで撫で、それから顔、体、手先に触れて、人形の形を確認していく。そしてほんの少し口元を緩めた。

首をだらりと下げた、くたびれたその人形は何だかアルマにみたいだな、とインディは思った。

アルマは人形を片手で抱いて、にっこりと笑みを浮かべた。

目は見えていなくても、おもちゃは嬉しいのだろう。いや、友達がいなかったと言っていたアルマにとっては今までこういった人形が友達だったのかもしれない。

アルマが人形を動かすたびにりん、と鈴の音が鳴る。アルマはそれを不思議に思い、音をなぞるみたいに人形に触れて、足元の鈴に気付いて、大袈裟にりんりん、と振ってみせた。

随分と気に入ったようで、インディはそんなアルマの様子を優しいまなざしで眺めながら、ちょいちょいと人形の手に触れながら言った。

「——落とし物だけど、ぼろぼろだしもらって帰ろうか」

インディがそういうと、アルマはぱあっと明るく笑みを浮かべて、目をぱちぱちとさせた。

「いいの？」

「いいと思うよ。だってこの子も一人じゃ寂しいだろうし」

そうだよ、とアルマは元気な声で答え、インディは頷き、そして二人は新しい家族を連れて、家路についた。

「インディ、インディ」

アルマが人形を片手にインディを呼ぶ。片手を掴んで、ふりふり、と手を振らせる。

食事を終えたインディは、食器を洗い終えてちょうど一息つこうとしていたところだった。アルマはベッドそばのいつもの場所に座っていて、インディもいつもアルマと話をするときと同じようにアルマのそばに座った。

「なんだい、アルマ」

「私、ティナ。よろしくね！」

そう言ってアルマは不器用に人形の頭をぐいっと下げた。どうもお辞儀をさせたいらしいが、随分と人形は苦しそうな体勢で、インディはそっとアルマの手を取って、人形の頭をほんの少し上に上げてあげた。

「——こんにちは、ティナ。ボクはインディだよ」

アルマはにっこりと笑って、人形のティナの顔を上げて答える。

「助けてくれてありがとう、もう少しで意地悪な鳥に連れ去られるところだったわ」

「それは危ないところだったね」

「私のお姉さんもインディに助けてもらったのよねっ」

アルマはそう言いながら、人形を振り返らせて、自分の方へ向け、そして大きく頷く。それからインディに顔を向けて、にっこりと微笑んだ。

「ありがとうね、インディ」

そう言って、ティナと一緒に頭を下げ、そんな風にされたインディは少し照れた様子で頭を掻き、笑顔を噛んだ。

そして、アルマが真っ直ぐにインディを見つめて言った。目は見えていないというのに、そのとき、アルマがインディの目を見つめているように、インディには見えた。

「——もう少し元気になったら、一緒にお母さん探してくれる？」

どき、とインディの胸にインディにはわからない痛みのようなものが一瞬だけ通り抜けた。何故かあふれ出した唾を飲み込んでから、一呼吸置いて、答えた。

「う、うん。もう少し元気になったらね……」

言いながらインディは自分の胸を擦った。初めて感じるよくわからない僅かな痛みが渦巻くように胸の奥を微かに掻いていた。

「じゃあ、がんばって元気にならないと。インディの料理おいしいからきっとすぐに元気になれるね」

にっこりと笑うアルマに、インディはそうだね、と答えた。わざと明るい声で答えたが、

インディは上手く笑みを浮かべることが出来なかった。

アルマが足の痛みを訴え始めたのは、それから数日してのことだった。

朝日がようやく顔を出し始めた早朝、アルマのか細い声泣き声でインディは目覚めた。

ベッドの中、眉を寄せて痛む足を擦りながら、アルマは目を開いてじっと痛みの感じる方を見つめていた。

インディが駆け寄ると、その足音に気付いてアルマは動揺しきった様子で視線を泳がせ、インディに言った。

「足が痛い。ぎゅって掴まれているみたいに痛い。昨日までなんともなかったのに……」

「どこかでぶつけたのかな？ 立てそう？」

いつも物伝いに手をついて歩くアルマは、一見するといつつまづくか分からないようなおぼつかない足取りに見えた。だけど目の見えないアルマにとっては、それが細心の注意を払った歩みで、実際に何かにつまづくようなことは今までなかった。

インディに聞かれて、アルマは一つ頷くとゆっくりと足を動かして、足を床に下ろし、一度立ち上がろうと腰を浮かして、立ち上がろうとした。しかしすぐにすどん、とお尻をベッドに下ろした。

「だめ、痛くて立てそうにないよ……」

アルマは酷く落ち込んだ様子で俯き、インディは眉を寄せた。どうしてこんないきなり具合が悪くなったのか、インディにもアルマにも覚えがなかった。

どうにか元気付けられないかと考えたインディはそっとアルマの手を取って、痛む足を気遣いながら、いつものようにアルマを片手で抱き上げた。

「——大丈夫だよ！ こんなのをすぐによくなるさ」

わざと出した明るい声。アルマはまだ少し驚いた様子で、インディの声の方を見上げて、それから小さくこくりと頷いた。

「よし、とっておきの場所に連れて行ってあげるよ」

もう外は随分と寒くなり始めていた。部屋の窓には朝露がぽつぽつと水滴をつけて、窓を濡らしていた。

インディはベッドから毛布を一枚とってアルマに羽織らせると、家の扉を開けて、外へと飛び出した。

朝の冷たい風がアルマの頬を撫でて、アルマは身を縮める。インディはそんなアルマを風から守るように抱き、野道を駆けた。

木の枝を掻き分け、川をひと飛びして、インディはまだ人が立ち入った事無い深い森の奥にある山のふもとに立った。

そこは、一面の花畑だった。もう秋も終わりだというのに、その場所だけがまるで春のように色とりどりの花を咲かせていた。獣の通ったあともなく、咲き乱れる花びらが風に舞う。

ふわり、と花の香りが鼻にかかり、アルマの表情が緩んだ。

「——ここは？」

顔を上げたアルマが、灰色の目であたりを見回しながら言った。目が見えていた頃の癖が残っていたのだろう。

インディはそんなアルマを優しく地面に下ろして答えた。

「ここはね、ボクが小さな頃にお母さんに教えてもらった秘密の場所なんだ」

花畑に座り込んだアルマは、辺りの匂いを嗅ぎながら、インディの手をぎゅっと握った。

「——お母さんがいなくなって、一人ぼっちで寂しい時はいつもここに来てたんだ」

「そうなんだ……」

振り返りもせずアルマは言い、ほんの少し俯いて、微笑む。

「アルマに見せてあげられないのが残念だなあ。きっと気に入ると思うのに……」

インディがそう言うと、アルマはインディに振り返って、笑顔を見せた。先ほどまで痛みで苦しそうに眉をしかめていたのが嘘のような、明るい笑顔だった。

「——見えなくってもね。分かることはたくさんあるの。……花の香りとか、葉っぱが風に揺れる音とか、鳥の泣き声とか……」

アルマは見えない目をわざわざ閉じて、静かに深く呼吸をした。しんと静まり返ったその場所に、僅かな音が辺りからさわさわと流れ込んできた。

「それにね、インディの声が、ここがどれだけいいところか教えてくれるの。優しくってあったかい、インディの声がね」

そう言って、空を仰ぎ、そしてゆっくりとインディを振り返り、ずっと繋いだままだった手を頼りに、インディの体に優しく触れた。

インディはアルマに導かれるようにその場に膝をつき、アルマはインディの胸元に手を置いて言った。

「インディ、あなたはどんな姿をしているの？」

アルマはまっすぐ、インディの胸元を見つめていた。見えていないけれど、それでも真剣なまなざしでじっと、インディを見つめていた。

「——ボクは……」

——怪物。怪物なんだよ。みんなが恐れて逃げていくような、怪物……。

インディは、唇を噛み締めて、言葉を飲み込んだ。そんな自分に優しく触れてくれるアルマを今にも泣きそうな顔で見下ろし、すん、と鼻を鳴らした。

ボクは、怪物なのに……。

「アルマの……アルマの目が見えなくてよかった……。きっとアルマの目にボクの姿が映ったら、きっとアルマもボクを怖がってしまうから……」

ぼろぼろ、と涙が流れていた。ぽたぽた落ちる大粒の涙が、アルマの手に水滴の粒がついた。アルマは手探りでそっと手を上に持っていき、インディの頬に触れ、インディの涙を拭いた。

「——そんなことないよ」

アルマは優しく、包むようにインディの頬を撫でながら言った。

「私はインディがどんな姿だってね、きっと怖くはないよ」

「——ほんとに？」

うん、とアルマは頷き、なおも優しくインディの頬を撫でながら答える。

「——だって、私はもうインディが怖くないの知ってるもの。インディの優しい声も、インディ

が大切にしてくれてることも、私は知っているもの。私は目が見えない代わりに、私にはインディの心が見えているもの」

「ボクの……心？」

アルマはこくりと頷いて、そっとインディの胸元に耳を押しつけるように抱きついた。

「——インディの胸の奥にあるのよ。私の胸の奥にもあって、みんなの胸の奥にある大切なものなの」

止まりかけた涙が、またインディの瞳を濡らし始めた。

「外側なんて、どうだっていいんだよ」

——この子は、ボクの姿を知らないのに、ボクのことを分かってくれる。怪物だといわれるボクの心を、ボクの全てを。

インディの胸の奥が熱く唸った。喜びか、悲しみか、インディが今まで知らなかった感情が沸き起こり、インディは細いアルマの体を抱きしめていた。

手放したくない。どうしても。

一緒にいたい。いつまでも。

そうインディが願った瞬間、ざわり、と静かにインディの赤い体毛が、より濃い色に変化した。僅かに、少しずつ体が黒く変わっていくことにインディは気付かなかった。

「ねえ、インディ」

インディの胸元に耳を押し付けたまま、アルマが呟くように言った。

「もし、私が元気になれなくて、お母さんにも会えなくなったら、そのときはずっと一緒にいてくれる？」

ごくり、とインディは息を飲み込み、震えそうなる声を抑えて、しっかりとアルマに答えた。

「うん、ずっと一緒にいるよ。どんなことがあったって、ボクがずっとアルマのそばにいるよ」

——だから、ずっと一緒にいて。ボクのそばから離れないで。

「ほんとう？ 約束だよ？」

「うん。約束するから」

——だから、ずっと、そばにいて。

そうして二人はその日、ずっとその花畑にいた。春の陽気に包まれたような暖かその場所には、一人の少女と一匹の黒い獣が寄り添うように座っていた。

風が吹いた。咲き乱れる花びらが、静かに、静かに舞っていた。

「——おばあさん、ボクはどうなってしまったの？」

花畑から帰った翌朝、インディはまだベッドで眠るアルマを置いて、一人森の奥で暮らす魔法使いのおばあさんの家に来ていた。

両の手のひらを眺めると、昨日までとはまるで違う、真っ黒な手。

おばあさんは、顔をしかめて目を細め、そして櫛の木のように細く頼りない手でインディの手を優しく撫でながら、震える声で言った。

「ああ……インディ。なんて可哀想に……こんなに体を黒くしてしまうなんて、お前いったい何をしたんだい？」

憐みを込めたその声に、インディは困惑し、おろおろとしどろもどろに答えた。

「ぼ、ボクは何もしてないよ。気がついたらこうなっていたんだ」

悲しそうな目でおばあさんは、唇を軽く噛んで、それからインディを見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「インディ……。お前はね、特別な獣なんだよ」

「——とくべつ？」

インディが首を傾げて聞き返すと、おばあさんは震える体でこっくりと一度首を縦に振って、続けた。

「そうだよ、インディ。お前は特別な力を持ってる獣なんだよ。——奇蹟を起こす、特別な力を……」

「奇蹟……？ 奇蹟ってなに？」

「何でも叶える不思議な力さ。でもね、それは自分のために使っちゃいけない力なんだよ」

おばあさんが手を伸ばすと、インディはそっと身をかがめて、おばあさんに自分の髪を触らせた。真っ黒になってしまったインディの髪をただれた手で優しく撫でる。

インディは不安に目を揺らして、ただおばあさんの言葉を待った。

「お前が自分の思うままに奇蹟を起こすとね、お前はその代わりに身体も心も黒に塗りつぶされて、本物の怪物になってしまうんだよ」

言葉が出なかった。おばあさんの言葉が、インディの胸の奥をぐるぐると回り、頭はがんと鐘を鳴らしたように痛んだ。

見下ろすと、真っ黒な自分の体があった。

足を弱らせた老婆がインディの姿を哀れんで、見上げていた。

「今は体だけだけど、このままだといつか心も真っ黒の怪物になってしまうんだよ」

「——い、嫌だ！」

——ボクは怪物じゃないよ。ボクの心は怪物じゃないよ。

「怪物なんて嫌だ！ アルマが言ったんだよ。ボクの心は怪物じゃないって……言ったんだよ。……言って……くれたんだよ」

アルマの優しい声が、アルマが触れてくれた胸元に甦ってくる。

——もうインディが怖くないの知ってるもの。

「嫌だよ……怪物なんてなりたくないよ……」

——アルマが優しいといってくれた、ボクの心。

「どうしたらいいの？ ボクはどうしたら……」

「——インディ。いいかい？ 怪物になりたくないならね、誰かのために奇蹟を起こすんだよ。誰かの幸せのために、奇蹟を起こすんだ」

「誰かの？」

すんすん、とインディの弱いすすり泣きが響いた。真っ黒な体を小さく丸まらせて、おばあさんに覆いかぶさるように静かにインディは泣いていた。

「——分かっているんだろう？ お前のすぐ近くにいるあの子のことだよ」

顔を上げると、おばあさんは真っ直ぐとインディの目を見つめていた。おばあさんの瞳の中に真っ黒になった自分の姿が映りこみ、ずきりとインディの胸が痛んだ。

「——あの子をここへ導いたのもお前の起こした奇蹟なんだよ。お前が願ってここへ繋ぎ止めたあの子を、帰してあげられるのはお前だけなんだよ」

——望んでいたことのはずだったのに、分かっていたはずだったのに。

アルマが、母親の話をするたびに、インディはずっと不安になっていた。やっと一人じゃなくなったのに、また一人になってしまうんじゃないかと、ずっと不安だった。

アルマがずっとここにいればいいのに。ずっと胸のどこかで願っていた。

そう願うたびに、胸元がちくちくと痛んでいた。

インディは、ただずっとアルマのそばにいて欲しいと願っていたのだ。

だから、人形を拾った。

だから、アルマの足が弱くなった。

そばにおいておきたいから、出て行けないように、どこかで願っていたのだ。

だけど、このままじゃいけないんだ。

インディはごしごし、と涙を拭った。唇を噛み締めおばあさんに背を向け、ぺこりと頭を一度だけ下げて、家を出た。

ここにいることは、あの子の幸せじゃないんだよね。

——お母さんに会えないのが寂しいの、ボクが一番知っているはずだったのに。

「インディ？ どこにいったの？」

家に帰ると、ベッドから体を起こしたアルマがさも退屈そうに口を尖らせて言った。

アルマはいつもと変わらない様子で、インディは少しほっとしていた。今も痛いであろう足は、ベッドの毛布に隠れて見えず、その太ももの上には人形のティナがちょこんと座っていた。

「ああ、起きたんだね。——おはようアルマ。今朝はちょっとおばあさんのところに行ってきたんだ」

インディはそういうと、腕いっぱいを持った荷物を床に置いた。おばあさんに貰ったものや、森で見つけた珍しいもの。そしていつも持ち歩いている白い布袋から、一つ一つテーブルにきらきらと可愛らしい装飾品を並べていった。

「アルマ、パーティをしよう」

きょとん、とアルマは目をぱちくりさせて、ごそごと勝手に用意を進めるインディに首を傾げた。

「パーティ？ 何のパーティなの？」

「え？ ——ええっと、考えてないや」

インディがそう答えると、とアルマは膝元に座らせていたティナを抱きかかえてくすり、と笑った。

「なにそれ、ヘンなインディ。普通パーティっていったら、誕生日とかいろいろあるじゃない。——そういえばインディって誕生日いつなの？」

急に訊ねられて、インディは首を傾げた。そういえば、自分の誕生日をいつか聞いたこともない。

「うーん、知らないや。アルマは？」

「年の終わりの一週間前だよ。冬のちょうど真ん中なんだよ」

ふうん、とインディは部屋の飾り付けをしながら、年の終わりがいつなのかを考えた。近いうちに、おばあさんからカレンダーをもらわないとなあ、とぼんやりと思った。

「——じゃあ、今日がインディの誕生日にしようよ。それならパーティもできるよね」

ぽん、と手を叩いて言うアルマにインディは、満面の笑みを浮かべて頷いた。

「そうだね、それがいい」

インディはその言葉を境に、張り切ってパーティの準備を進めた。部屋の飾りつけもそこそこに、インディは料理を作り始め、アルマと決めた自分自身の誕生日パーティを彩っていった。

家を飾り付けを終え、いつもよりも蝋燭を多く点けて、部屋を明るく彩ると、いままでは殺風景だったインディの家も随分と賑やかになっていた。

家中にインディがふんだんに腕を振るって作った料理の匂いが満ちていた。ケーキはさすがに用意できなかったけれど、それでもいつもよりずっと食卓にはおいしそうな料理が並べられていた。

「お歌を歌うわ。誕生日の歌よ」

ベッドの上のアルマはそういうと、手拍子をしながら、バースディソングを歌い始めた。膝元に座るティナの足の鈴がアルマの手拍子に合わせてりんりんと音を鳴らす。

インディは嬉しさでドキドキとする胸を抑えて、そんなアルマの歌声を胸の奥の大事な心の中

にしまっていく。大切に大切に、一つ一つ。

「ああ、急だったから何もプレゼントを用意してないわ……」

歌が終わり、アルマはそう呟いてうーん、と首を捻ると、何か思いついたのか、ぱっと顔を上げて、ティナの足に手を伸ばした。

アルマは抱いていたティナの足から鈴を外して、インディに差し出すと、「私とティナからのプレゼントよ」と言って、インディの手の平にそっと鈴を乗せた。

「いいの？」

「——お誕生日のプレゼントだもの。良いに決まってるじゃない。——だけどちゃんと大事にしてくれなきゃ嫌だからね」

アルマはそう言ってインディの手の甲に頬を当てた。アルマの柔らかな頬は温かく、インディは震える体を抑えて、目頭を押さえた。

そして二人は食事を食べ、たくさん話をして歌を歌った。そうして時間が流れていった。

森を夜空が覆っていた。満天の星空の中、ぽっかりと浮かんだ月が冬の静寂に満ちる森をただ照らしていた。

窓からその月を見上げながら、インディは穏やかな声でアルマに言った。

「散歩に行こうか」

露が窓に一筋、線を作った。くすんだ窓に映る、真っ黒な自分の顔。

「——もう夜じゃないの？ こんな時間に散歩？」

「うん、でも月が綺麗なんだよ」

インディは静かな声でそう言う。アルマは首を傾げて、ベッドから足を下ろした。

「——ヘンなインディ。でもいいわ。ちゃんと抱っこしてね」

そう言って両手を広げるアルマを抱き上げて、インディは夜の散歩へと出た。

冷たい風から守るように、アルマを毛布で包んで、ゆっくりとした歩調で、いつもの道を歩く。ときどき月を見上げては、静かな木々の囁きに耳を傾ける。

アルマの、軽いけれど確かに感じる重みを腕に覚えながら、インディはアルマと初めて会った大きな木を目指して歩いた。

「——夜ってこんなに静かなのね」

「こうして夜に出るのは初めてだね」

「もっと、怖いものかと思ってたけど、インディと一緒にいたら怖くないわ」

にっこりと、微笑をインディに向ける。インディもアルマに微笑みかけ、そしてあの大きな木の前までやってきた。

「——アルマ」

ふわり、とアルマを地面に下ろして、手をつないだまま、インディはアルマの名を呼んだ。この数週間の間、呼び続けた名前。これほど、たくさん大切な人の名前を呼んだことなんてこれまでなかった。

きっと、ずっと忘れない大切な名前。

「なあに？ インディ」

首を傾げて笑むアルマに、インディは出来るだけ穏やかな声で言った。

「今日のパーティはね」

虫の声すら聞こえない静寂に包まれる森の中、インディは落ち着いた声で、ただ静かに続けた。

「——お別れのパーティなんだ」

アルマはしばらく黙ったまま、きょとんとした目で視線を泳がせていた。

「お別れ……？」

インディに訊ねるような口調ではなく、自分に問いかけるような、そんな声だった。

もう一度、口にしてみしてから、アルマはインディに聞き返した。

「インディ、お別れって……」

そこまで言って、アルマはごくりと唾を飲み込んで、黙った。続きを聞くのを怯えるような、今までで一番か細い声だった。

「——ボクはね、アルマと出会うまで、ずっと一人だったんだ。毎日、毎日一人ぼっちで、寂

しくってよく一人で街を遠くから眺めていた。幸せそうに笑う家族っていうのにボクはすごく憧れていたんだ。——そしたらアルマを見つけて、一緒に暮らすようになって、一人じゃない幸せを知って、これが家族なんだなって思ったんだ」

怯えるアルマの頬を撫でる。アルマは目を細め、そのインディの手をそっと握る。

「——でもね、アルマには本当の家族がいる。だからね、アルマは本当の家族のところに帰らなくっちゃいけないんだ」

ふるふる、と唇を噛んで、アルマは首を振った。何度も首を振って、それからインディを見上げて言った。

「どうしてもお別れしなくっちゃいけないの？ 帰るなら、インディも一緒に行こうよ」

今度はインディが首を横に振った。それが分からないアルマは黙って潤む瞳でインディにしがみついていた。

「ダメだよ。ボクにはボクの家があるから。——それに人間はボクを怖がってしまうから」

「寂しく……ないの？」

柔らかな、アルマの髪を撫でる。ぽろぽろ、と涙が瞳からこぼれた。

「もう、寂しくはないよ」

「私は寂しいよ……」

大丈夫だよ、とインディはかがんでアルマを優しく抱きしめる。暖かな体温を分け合うように、ゆっくりと鳴る心音が互いの耳に響いていた。

「ずっと……ずっと一緒に、一緒にいてくれるって約束したじゃない。私……インディと一緒にいたいよ」

「ごめんね、アルマ。——でもどんなに遠くに離れても、ボクはちゃんとアルマのそばにいるから」

——だから泣かないで。ぽろぽろと落ちる涙を拭う。水滴が、黒いインディの指について、インディはまた優しくアルマを撫でた。

「目を瞑って……」

インディがそう言うと、アルマはそっと目を瞑ってインディを見上げた。

「ボクにはね、奇蹟を起こす力があるんだって。たぶん神様がくれた大切な力。だけどボクはそのことを知らなくて使い方を間違えていたんだ」

「奇蹟？ 奇蹟ってなんなの？」

目を瞑ったまま、アルマが眉を寄せる。インディは優しい声で、アルマに言った。

「人がね、幸せになる瞬間のことだよ。——今からボクはアルマに最後の奇蹟を起こすよ」

宝物を、大切に扱うみたいに、インディはアルマの髪を優しく撫でた。

「——アルマ、友達になってくれてありがとう。家族になってくれてありがとう。幸せを教えてくれてありがとう。ボクはもう一人でもきっと大丈夫」

心に満ちる、言葉をこぼした。しんしんといつの間にか積もるように集まった言葉だった。

「——だってボクはもう人間が怖くないの知ってるもの」

——だからきっと大丈夫。

静かにインディは目を瞑った。幸せすぎた日々を振り返り、そして心の中で願った。
——だから、君に、幸せを。

その瞬間、アルマの体からインディの感触が消えた。そしてすぐにアルマの耳に懐かしい声が響いた。

「——アルマ？」

母親の声に、アルマは目を開いた。アルマは一瞬目をしかめ、そして入り込んでくるどこか懐かしい光景に目を細めた。

揺れる木々、高く上がった丸い月。きらめく星。

そして、遠くの木々を飛び越える、赤い獣の姿。

こうして、二人の生活は終わりを告げた。アルマは森の中、ただ母に抱かれて泣き続けた。

白い雪が町を包んでいた。しんしんと降る雪は周りの音を全て消すみたいに、ただ静かにつきもり続ける。

明日はアルマの誕生日。町はもうすぐ明ける新年に向けての準備に忙しそうだった。

母と誕生日の買い物を済ませたアルマは、買ってきたばかりの品物を眺めながら、あの日もこんな感じだったのだろうか、と振り返った。インディの声と、インディの料理の香り。それだけが頭の中に甦ってくる。

目が見えるようになって、普通の子と同じように遊ぶようになり、だんだんアルマにも友達が増えていった。一人で寂しい思いもしなくなった。

だけど、ときどきやっぱり寂しさを感じる。アルマは一番の友達を思い出しながら、毎日を過ごしていた。

その夜もやっぱりインディのことを思いながら、布団に入った。外の雪は静かに降り続いていた。

かしやり、と音がしたのは夜の十二時を過ぎた頃だった。

ひやりとした風が舞い込み、アルマは目を覚まし、眠たい目を擦りながら体を起こした。

ほんの少し、雪が部屋に入り込んでいた。すぐに雪は水滴に変わる。

「——窓、ちゃんと閉めてなかったのかな？」

アルマはベッドから足を下ろして、窓際に近づくと、遠くからりんりん、と鈴の鳴る音がした。聞き覚えのある、鈴の音。

りんりんりん。

インディにあげた、ティナの小さな鈴の音。

「インディ!？」

窓の外を見ると、街は月の光で照らされて、雪が淡い青色にきらきらと輝いていた。木々にはそれぞれ、きらきらとした装飾品が飾られていた。

そのとき、屋根から屋根へと影が飛んだ。赤い、大きな影。

アルマは上着を羽織って、すぐに家を飛び出した。

雪に足あとをつけながら、アルマは影の去った方へ向かって走った。

踏みしめる雪の音、遠くに聞こえる鈴の音。頬を撫でる冷たい風に、息が白く流れる。

胸がどきどきと内側からアルマを叩いていた。通り過ぎる景色を見回して、懐かしい、会いたい友達を探した。

教会に向かう路地を曲がったところで、アルマと同じように、パジャマに上着を羽織っただけの服装で表に出ている友達に出くわした。男の子が二人、女の子が一人。

「アルマ、君も見たの？」

男の子はブリキのおもちゃを片手に持っていた。女の子は可愛らしい人形を抱いていた。

りんりんりん、と遠くに鈴の音が響いていた。

教会の鐘が静かに重く響いた。

「——これがね、窓のそばに置いてあったんだ。窓の外をみると、遠くに大きな白い袋を持った真っ赤な服を着た人が……」

「おじいさんだったよ！ 良く見えなかったけど、口元に白いお髭があったもの」

アルマは教会を見上げた。りんりん、と鈴の音は遠ざかり、しんしんと降る雪が変わりにアルマの肩に降った。

——インディだ。私の誕生日を覚えていてくれたんだ。

祝ってくれてるんだね。町全体でパーティを開いて。

鈴の音が止み、みんなそれぞれおもちゃを抱いて笑顔でそれぞれの家に帰っていった。

上着を脱いで、アルマが部屋に戻ると、ふと、窓際に二つの人形が置いてあるのに気付いた。月明かりに照らされる二つの人形。

一つはくたびれた女の子の人形。抱き上げると懐かしい感触が甦ってくる。

「——ティナ」

久しぶりに名前を呼んで、ぎゅっと抱きしめる。ほんの少しインディの優しい匂いがした。

そして、もう一つは真っ赤な毛皮の獣の人形。優しく、インディにそうしたようにそっと頬を撫で、抱き上げた。

それから毎年、アルマの誕生日には子どもの家に人形やおもちゃがどこからともなく贈られるようになった。

小さな鈴の音と、共にやってくる赤い服のおじいさんがプレゼントを持ってくる。

それは12月24日の夜の出来事。